紫苑（しおん）

1

「ここだ…」
そう呟いて章雄は立ち止まった。
「カフェ・アルル？、おかしいな…」
店先の看板を見て章雄は小首をかしげた。この店はフレンドだったのだが…
よく見ると違うのは店名ばかりではない、店の外観もまるで違う。
「やはりなくなったのだ、あの店は…」
章雄はがっかりし、入るか、入るまいか迷った。
そんな心を余所にその手は入り口のドアを押していた。
ーカランー
乾いたウベルの音が店内に響いた。ここはあなたの尋ねる店ではありません。
カウベルの音がそう告げているように章雄には聞こえた。
客はいない。いないのは客ばかりではない。人の姿がないのである。
「やっぱり帰ろう」
そう思って章雄は閉まったドアに手を延ばそうとした。
そんな思いに逆らうように足は勝手に店の奥へと動いていた。
「まあいいさ、コーヒーでも飲んで帰ろう」
そう腹を決め、章雄はカウンターの隅に腰を降ろし、あらためて店内を見渡したが。
やはりどこにもフレンドの名残りはない。
章雄が通った店はもっとレトロな感じの造りだった。あのころは周りの商店街その

ものが時代に置いてきぼりにされたようなところがあり、良く言えば古き良き時代が残った街だった。
そこは阪急の三宮から梅田寄りに二駅目の駅の近くの商店街で、フレンドという喫茶店はその商店街の入り口を少し山側に外れた所にあった。
この辺りも阪神大震災で無傷ではなかったらしく、駅の山側の道路は拡幅され古い家並みもすっかり姿を消している。駅の建物はかろうじて当時の名残を留めてはいるが、西灘と呼ばれていたその駅は今では王子公園駅へと名前を変えている。
章雄がこの街を離れてもう随分と歳月が流れている。それを思えば店がなくなっていても決しておかしくはない。
コーヒーを頼もうにも注文する相手がいない。
さあどうしたものか、章雄は自分をもてあました。

＊　＊　＊

どういう風の吹き回しか、今朝、目が醒めた途端、久しく記憶の外に霞んでしまっていたこの街を思い出した。
思い出すと矢も楯もたまらなくなった。朝食もそこそこに大津の自宅を飛び出し、電車に飛び乗った。梅田で阪急線に乗り換え、つい先ほどこの街に着いたのである。
章雄がこの街に住んだのは神戸の会社に就職したのが縁だった。会社は精密機械の部品メーカーで本社は三宮にあった。工場は十三にあり、そこでは大手の機械メーカーに納める部品を一括下請の形で製造していた。他にも小さな町工場を再下請けにして別の会社に納める部品も造ってはいたが、売り上げに占める割合は小さく、大手の元請けが頼みの綱の会社であった。幾つかの特許と他社にはない製造技術のノウハウが経営者の自慢だった。
元請けのメーカーはその製品のほとんどを欧米に輸出していた。

章雄は入社するといきなり営業部への配属された。同期入社の者はすべて製造現場へ配属されていた。製造現場の経験を経てから営業に廻す。この会社ではそれがノーマルなコースで、章雄のようなケースは希であった。独身寮が西灘のこの街の一画にあった。東京の近郊で育ち、大学も東京にあったので神戸の街は初めてだった。入社したその日から章雄は神戸の街が気に入った。コンクリートジャグルが果てしなく広がる都市荒野の東京とは異なり、海に沈み込むなだらかな六甲、摩耶の山裾に帯状に広がった神戸の街は、東西に平行しながら延びる幾つかの道路と山から海へ下る無数の坂道が網目状に交差し、どこにいても海と山の自然の豊かさが実感できる。寮の窓からみる港の夜景と、寮の庭から眺める朝の摩耶山の景色が特に好きだった。戦後三十年近くが過ぎ、世界はめざましく変わりつつあった。

章雄が大学の二年になった頃、ニクソンショックが起こり金とドルとの交換は停止され、スミソニアン体制をへて翌年には日本を含む多くの先進諸国が変動為替相場制へと移行し、ドルを基軸とする準金位性のブレトン・ウッズ体制は崩壊した。やがて第四次中東戦争が勃発し、世界にオイルショックが走った。トイレットペパーや洗剤が手に入らなくなる。そんなうわさが、どこからともなく起こり、うわさが噂を呼び、全国の主婦が、来る日も、来る日も物の買い溜めに走り廻った。田中内閣の日本列島改造政策と赤字公債を乱発しての公共投資と春闘での未曾有のベースアップ。あれやこれやで変動制に移行して間もない日本の円相場は急激に上昇していた。昭和三〇年代に始まり、長らく続いていた日本の高度経済成長はようやく終りを迎え、狂乱物価と呼ばれる強いインフレと不況というダブルパンチを日本の社会は受けていた。それまで右肩あがりで増え続けてきた日本の貿易収支の黒字は高度成長に入って初めて赤字に転じていた。

章雄が神戸の会社に就職したのはそんな時代で、神戸の街はオリンピック後の不況

をしのぐ不況の逆風が吹いていた。

新入社員の全員を何年か寮に住まわせるのがこの会社の方針で、寮生活を社員教育の一環に位置づけていた。しかし、章雄には独身寮の退屈さが、どうにもたえ難かった。それに賄いの食事が何ともまずい。朝は仕方なく寮の賄いで済ませるが、夜はどうしても自分の好きな物を食べたくなる。それに、晩酌で一杯の誘惑も捨てがたかった。章雄は入社して間もなく寮と幾筋かを隔てた通りにあるフレンドという喫茶店を見つけた。寮で食事をとりコーヒーでもと思って外出し、一見で入ったのがその店だった。そこからは毎晩のようにその店に行くようになり、気がつくと、会社を出るとフレンドへと直行するようになっていた。

フレンドは喫茶店ではあるがメニューは雑多で、定食も出してくれるし、何よりも花見酒が飲めるのが嬉しかった。花は店を経営している若い姉妹である。若いといっても姉の方はもう三十を過ぎていてシングルマザーのようであった。店の二階が姉妹の住まいで、赤ん坊の泣き声がすると、姉は奥の階段を上っていった。

章雄にとっての本命は妹の方で、年の頃も章雄とどっこいどっこいで、日陰でひっそりと咲く著莪(しやが) の花のような控えめな美しさが章雄ごのみだった。雪子といった。章雄は会ったその日から雪子に惹かれた。

雪子は誰もが好く正札美人なのかどうかは章雄には分からない。この店に顔を出す同僚は誰もがむしろ姉の方に興味をもち、雪子の方にはあまり感心を示さないからだ。姉の方は派手に咲く罌(け) 粟(し) の花のようなあでやか美人だが毒を含んでいるようで章雄は好きになれなかった。

大学の四年間を男ばかりの殺伐とした下宿で送った章雄には、この店の空気がとても華やかで温かいものに思え、営業に飛び回っていても花を愛でながら酒が飲める夜の時間が待ちどおしくて仕方なかった。

そんな生活が半年ほどあって、章雄が神戸を離れる日が突然にやってきた。
会社が不渡り手形を出して倒産したのである。
あれから、もう数えるのが面倒なくらい年月が流れている。

＊　＊　＊

奥の飾り棚には銘柄の洋酒や焼酎の瓶がずらりと並んでいる。
ボトルにはサインとか目印とかを書き込んだ札が付けられている。客のリザーブらしい。夜はスナックに変身するようだ。カウンタ席がメインなのもそのためだろう。
テーブル席は三つあるだけだ。
フレンドの店は調理場を囲むように扇型のカウンターがあり、テーブル席の数がもっと多かった。姉を目当ての客はカウンターに陣取るし、飲む客はゆったりとして居心地の良いテーブル席を好んだ…
店の品定めにも飽きた章雄は、
「やはり帰ろう！」
そう腹を決めて椅子を蹴ろうとした。
その時、
「あらっ…！」
と、頓狂な声がカウンターの中からし、若い女がぬっと顔を出した。
「ごめんなさい、気がつかないで…」
女はびっくり顔でそう言い、目の前の章雄をしげしげと見つめた。カウンターの中での屈み仕事に気を取られていて、客の章雄に気づかなかったらしい。
どうやらそれが店の経営者らしい。
びっくりしたのはむしろ章雄の方だった。
女がいきなり現れたからではない。その女に驚いたのである。

「あっ、雪ちゃん！」
章雄は思わずそう叫びそうになった。色白でやさしい笑顔、それに耳にはあのイヤリング…、
あのイヤリング…、それは章雄が神戸を離れる一月ほど前のことだった。その頃の章雄は寮の風呂を嫌い、フレンドの幾筋か東よりにある「みどり湯」という銭湯に通うようになっていた。ある夜、フレンドで食事をすまし、寮への戻りがけにその銭湯の暖簾をくぐった。お金を払おうとしてふと見ると番台の向こう側で雪子がにっこりと笑っていた。番台越しといっても、ほんの目と鼻の先である。その時の雪子の耳を飾っていたイヤリングである。
淡い紫色をおびた菊の花のような美しい造りがとても印象に残った。それは今でも章雄の目にしっかりと焼きついている。
目の前に現れた女がそのイヤリング、いやそれと同じイヤリングをつけていたのである。それに色が白くて優しげな顔立ちまでがそっくりなのだ。
しかし、考えて見れば女が雪子である筈がない。女はどう見てもまだ三〇歳そこそこだし、雪子なら章雄と同じくもうとっくに還暦を過ぎている筈なのだ。
「いつものでいいですか？」
女は経営者の顔にもどって尋ねた。
章雄は黙って頷いた。
女はそのまま無言でコーヒーを淹れはじめた。
それからしばらく沈黙が流れた。
その沈黙の中でまた章雄は思った。
初めての客なのに何んで「いつもの」だろう？、それにこの俺も、何で「うん」なのか？。それにしてもだ…、どうしてこんなに雪子とそっくりなのか、この女？、

それにイヤリングまで…、
もしかして…、夢を見てるのか？
頭の中は疑問ばかりくるくるまいまいしていた。
ーカランー
ウベルが鳴った。
その音と共に五〇年配のおばさんの二人連れがどかどかと入ってきてカウンターの中央あたりにどっかりと陣取った。
たちまち店内が賑やかになり、雪子もどきもカウンターの中からおばさん達のおしゃべりに相づちをうっている。常連客らしい。
章雄一人だけ蚊帳の外である。
女がそっと出してくれたコーヒーを飲み干してしまうと、章雄は途端に手持ちぶさたになった。
ーカランー
またカウベルが鳴った。
「あら、麗ちゃん…、今日はまたとびきり綺麗ね…」
その言葉と一緒に五十がらみの女がもう一人、店に入ってきた。
カウンターの女はどうやら「麗ちゃん」と呼ばれているらしい。
「まあ、郁代さんたらお上手ね…」
麗ちゃんが返す。
後から入ってきた五十がらみは「郁代さん」らしい。
「ほんとよ麗ちゃん。あんた益々お母さんに似てきたわ！」
と郁代さん。
「お母さんって、どっちのお母さんよ！」

先客の五十がらみが脇から口をはさむ。
なじみ同志らしい。
「決まってるじゃないの、雪ちゃんの方よ！」
と、別の五十がらみが割り入む。
「だって洋ちゃんの方もとびっきり美人だったじやない」
と、隣の五十がらみが言い返す。
「そうだけど、洋ちゃんは「あんな女」だったから…」
と、先の五十がらみ。
何の話やら章雄にはさっぱり分からない。
先客の方の二人の五十がらみの間で「洋ちゃん」を巡って話の花が咲き始めた。聞いているのかいないのか、麗ちゃんはカウンターの中で忙しく手を動かしている。
後から入ってきた郁代さんは、その麗ちゃんをそっと指さし、花咲しの二人に向かって口に人差し指を当てた。
きっと「あんな女、云々…」が麗ちゃんに向かっては禁句なのだろう。
そこへまたカウベルが鳴って客が入ってきた。
それから次々と客が続き、店が満杯になった。
ここが潮時と、章雄は席を立ち、店を出た。
後を振り向くと麗ちゃんがドアの外に立って見送っていた。

2

ーカランー
章雄はカフェ・アルルのドアを押した。

あれから二か月ほどが過ぎていた。
「いらっしゃい！」
麗ちゃんの透き通るような声が迎えた。
章雄はあれからずっと麗ちゃんのことが気になっていた。
そして、今朝、やっと思い出したのである。
客の五十がらみの口から出た「洋ちゃん」はあの雪子の姉の名前だということを。
あの場は姦し中年の熱気に呑まれ何の話やらさっぱり分からずに聞き流していたが、「雪ちゃん」はあの雪子に違いないし、雪子の姉の年増は確か洋子という名前だった。
だとすると、やはり麗ちゃんはあの雪子と縁りのある人なのだ。似ているのはその精なのだ。そう確信した。そうと分かると、章雄はもう矢も楯もたまらなくなったのである。
「きっと来てくれると思ってたわ」
麗ちゃんはコーヒーを淹れながら微笑んだ。
客はアベックの一組だけである。一見の客らしい。
この前のような騒々しい連中がいなくて章雄ははほっとした。
「はい、いつもの…」
そう言いながら麗ちゃんは淹れたてのコーヒーを章雄の前に出し、
「私ピンと来たわ、だってお客さんじっとこのイヤリング見てたもの！」
と麗ちゃんが笑う。
「ピンと来た？」
章雄は狐につままれる。
「うふふ」

麗ちゃんは意味ありげに笑い、
「大杉さんでしょう、お客さん」
そう言って麗ちゃんは章雄の反応を窺う。
「その下は、あ・き・お…、でしょ」
章雄はついた狐が抜けない。
そのキョトンとした章雄の顔を眺めながら、
「あ・き・お、って、章と雄の字でいいのかしら？」
と麗ちゃんが掌に字を書いてみせる。
章雄はそれを覗き込んで頷く。まだ言葉が出てこない。
「母から聞いてたの、いつも、大杉さんの事、何もかも…」
そう言って麗ちゃんはいたずらっぽく笑う。
「すると、やっぱり麗ちゃんのお母さんは雪子さんなの？」
やっと狐が抜けかかった章雄が尋ねる。
「えゝ」と、麗ちゃんは頷き、
「でもほんとは叔母さん！」、やや間を置いて「だけどやっぱり私の母！」
と謎々のような事を言う。
「これから章雄さんて呼ぶわね、母がそう呼んでたから…」
麗ちゃんは屈託なさそうに言う。
章雄は意外だった。
雪子は章雄のことを「大杉さん」と呼び、あまり名前で呼ばれたことがない。
「ほんとに僕を名前で呼んでたの、雪子さんが？」
「そうよ！」
麗ちゃんは何故そんなこと聞くの？、と言う顔をする。

「雪子さんどうしている？」
幸雄は一番知りたかった事をやっと尋ねた。
「亡くなったわ去年、ついこの間一周忌を済ませたばかり…」
まさか、の答えに章雄は言葉を失った。
「肝臓癌、お酒も飲まないのに、あっけない最後だったわ…」
麗ちゃんもちょっとしんみり顔になる。
「そう…」
章雄は溜息。
「良かった、やはり母が思っていた通りなんだ」
と、章雄の落胆する姿を見て、麗ちゃんが言った。
「ほんとはね…」
と、章雄の顔を窺いながら、
「待ってたのよ母は！、いつかきっと来てくれるって…」
と、麗ちゃん。
「ほんと、それ？」
信じ兼ねる章雄。
その章雄に向かって、
「ほんとにほんとよ、嘘じゃないわ！」
と麗ちゃんは少し向きになる。
「ごめん、ごめん、何だか信じられなくて」
と章雄。
無理もない。店での雪子は章雄にはよそよそしく、章雄が店に顔を出すと、
「今日はいないわよ！」

とか、
「今、二階、そのうちに下りてくるわ、ふふっ…」
などと、からかうのである。
「いない」、というのは、姉の洋子が、である。
つまり、章雄が姉の洋子を目当てに通ってくる。そう独り決めしている節があった。
でも、姉の洋子はまだ初な雪子と違い、子持ちの年増で、とても社会人一年生の章雄がかなう女ではない。
章雄は口にはしたことないが雪子にとても惹かれていたのである。
店ではよそよそしい雪子が、町ひょっこり出会ったりすると、とても愛想が良かったりする。章雄はそんな女心がさっぱり分からなかった。その分からない女心に益々惹かれていった。惹かれれば惹かれるほど、それを伝える勇気が萎えていく。そうやってくずぐずしている中にお別れの日がやって来た。

＊　＊　＊

それまで手堅い経営で知られていた会社がわずか四〇〇万円の手形が落とせずに不渡りを出した。それが二度目の不渡で会社は取引停止処分を受け倒産した。不況で発注元の機械メーカーの輸出が激減し、部品の発注がほとんど止まってしまったのである。こうなると丸抱えに近い下請けの会社は悲惨である。頼みの特許も製造のノウハウも何の役にもたたない。倒産が決まったその日のうちに社員は全員解雇を宣告された。退職金はおろか、予告手当もなく、一ヶ月間の給料も未払いのままだった。就職して間もない章雄に蓄えなどある筈もない。章雄は生まれて初めて飢の不安に曝された。倒産会社の社員など貧乏神扱いで、どこの会社も使ってはくれない。章雄は追われるように神戸を離れた。雪子と最後のお別れを、などという余裕などとてもなかった。

それからの章雄はずっと冬の生活が続いた。いろいろな仕事を転々とした。百科事典のセールス、スーパーのアルバイト店員、新聞の勧誘員、飲食店やパチンコ店の店員、屋台のラーメン屋やテキ屋まがいの仕事まで、手当たり次第にありとあらゆる仕事を経験した。食うためにはサラ金の取り立てまでして働いた。勿論、どれも大学卒の章雄が将来を託すに足る仕事ではなかった。しかし、仕事の選り好みなどしておれれる時代ではなく、働かなければ食べていけなかった。そうやって何年もが過ぎていった。

そしてたどり着いたのが不動産会社の社員だった。もうその頃には景気が持ち直し、好景気が戻っていて不動産は日に日に値を上げていた。会社は羽振りが良かった。生活も安定し、一人暮らしの章雄は少しずつだが蓄えも残せるようになった。今から思うと、そのままその会社勤めを続ければ良かったのかも知れない。

しかし、仕事を覚えてしまうと、社員としてサラリーで使われているのがばからしくなった。それまでため込んだ資金を元手に、独立して個人で不動産の売買と仲介の仕事を始めた。手堅く続けている限り必ず利益に繋がった。そこへバブルの好景気がやってきた。そして、それがつまづきの元になった。石橋を叩く商法など時代遅れの化石思考になっていた。不動産は買えば必ず儲かる。そんな過信が奢りを呼び、手堅く先を読む商売の勘と心を狂わせた。取引をする度に倍々ゲームのように増えていく資金を次々と新しい別の物件につぎ込み、それを担保に目一杯の借り入れをし、さらに多くの不動産を抱え込んだ。それがすべて倍に売れて大儲けし、大金持ちになれる筈であった。

しかし、好景気はつかの間で、そんな夢が醒める時がやってきた。不動産融資の総量規制が始まり、バブル景気は一挙にはじけて飛んだ。その煽りで章雄はそれまでの儲けのすべてを失い、手許に残されたのは高額の担保がついていて買い手のつか

ない土地と、一生かかっても支払いきれない膨大な借金だけであった。借金の取り立ては厳しかった。バブルの間は借りてくれ、借りてくれとえびす顔で手をすりあわせていた銀行員は、金がなくなると態度が豹変して取り立ての鬼に変わっていた。銀行や住専の取り立てはまだ手心があった。

儲けに欲張りすぎた章雄はいつの間にか街金からもかなりの資金を引っ張っていた。その取り立てはまるで情け容赦がなかった。命で支払えと、高額の生命保険に入ることを強要され、人相の悪い男に日々追いかけ回された。自業自得で落ちた借金地獄である。残された救いの道は一つしかなかった。西成で立ちん坊をして仕事を拾い、十日アンコをして働き、一日三食を一食に減らして自己破産のための費用をこしらえた。

どうにか破産宣告と免責を受け、借金の支払義務は免れることができた。しかし、一旦信用を失った男を相手にしてくれるまともな会社はなかった。世間はバブル崩壊後の不況のどん底に喘いでいた。遠い親戚のつてを頼り、米つきバッタのように頭を下げ、そのコネでやっと就職に漕ぎつけた。それが滋賀県の大津に本店をもつ小さなの信用金庫の営業の仕事だった。あともう少しで四十歳という年齢になっていた。

その三年後、同じ職場の先輩の静代と結婚した。年は章雄より十歳も下であったが、職場では大先輩である。一年後に長男が生まれた。章雄におそまきの幸せがやってきた。その幸せの中で、それまでいだき続けてきた雪子に対する思慕の気持が、淡雪のようにとけて消え、章雄の中で神戸は遠い過去の記憶になってしまっていた。幾つかの支店勤務を経て章雄が本店へ迎えられたのは、もうあと三年で定年という年になってからである。そして、定年の一年前に小さな支店の支店長に栄転し、そこで定年の日を迎えた。

＊　＊　＊

「ふふ…、何を考えてたの？」
章雄の顔を覗き込むようにしながら麗ちゃんが、
「随分と深刻な顔して考え込んでたわね…」
と可笑しそうに笑った。
「遠い昔のことを思い出してね…」
と章雄は照れを笑いで流した。
「あら、昔の事って、もしかしてそれ母のこと？」
「うん、まあ…」
「私さっき、母が章雄さんを待ってたって話したのよ。そうしたら章雄さんたら急に黙り込んで…、私なにか気に障ること言った？」
と、麗ちゃんは章雄の顔を見つめ、
「うふふ…」
と、いたずらっぽく笑った。

3

「すばらしい眺めだね」
章雄が麗ちゃんを振り向いて言った。
「ほんと、いつ来ても飽きないわ、ここからの眺めは…」
麗ちゃんもうっとり。
章雄と麗ちゃんは摩耶山へ来ていた。
ケーブルとロープウエーを乗り継ぎ、今は山上の掬星台の広場から下界から見下ろ

している。ここは章雄に思い出があった。
それは雪子との最初の、そして最後のデートだった。その日はケーブル下の桜のトンネルが満開で、まるで夢の花園を歩いているようにすばらしかった。それより増して感動したのが、山上のこの展望台からの眺めだった。
こんなすばらしい景観がほかにあるだろうか？。
章雄は心底そう思った。
その時の感動が今また甦ってきている。
あの日と同じように神戸の街と海、そしてそれを取りまく山や島々の大自然が、まるで美しいパノラマのように視界一杯に広がっている。ただ季節が春と秋と違うだけである。
あれはどういう風の吹き回しだったのだろうか…？。
その時のことを章雄は思い返していた。
それは、章雄がフレンドの店に通い始めて一ヶ月ほど過ぎた四月の初めのことだった。いつものように店でコーヒーを飲んでいると、
「ねえ、大杉さん、今度の日曜日に摩耶山にいかない？」
店の中ではあまり話しかけない雪子が、その日に限って章雄を誘ったのである。その日はたまたま姉の洋子が留守だった。そして約束の日曜日、雪子と来たのがこの展望台だった。わくわくする一日だった。
(あれが僕の青春だったのだろうか。夢のように短かい…)
章雄がそんな思い出に浸っていると、
「どうかしましたか？」
と、麗ちゃんが章雄の顔を心配そうにのぞき込んだ。
「つい昔のことを思い出してね…」

章雄は笑って心の照れを誤魔化した。
「母と来たときのこと思い出してたんしょう！」
麗ちゃんが図星を言う。
「…」
言葉にならない照れ笑いしか出来ない章雄。
「ピンポーンね！」
と麗ちゃんはからかうように言い、
「ほんとはね…」
と、言いかけ、しばらく間をおいて、
「ほんとは、うちの母、章雄さんに気があったのよ、きっと…」
章雄をじっと見つめながらそう言った。
「それはないと思うな」
心とちぐはぐの返事し、
「だって、雪子さんは店ではいつも僕に冷ややかだったもの…」
と章雄は言い繕いをする。
麗ちゃんは、その言葉を真に受けたのか、
「分かってないのね章雄さんは、何にも…！」
と向きになり、
「それはね、姉の洋子、つまり私の産みの母に気兼ねしてたからよ…」
と言い、
「男って駄目ね、女心がちっとも分からないんだから」
と章雄を目で詰る。
「もしかすると、雪子さんは僕が洋子さんが好きだとでも思っていたのだろうか？」

「逆よ！」
と、切り捨てる麗ちゃん。
「逆って？」
章雄も察しが悪い。
「だから、章雄さんを好いてたのは姉の洋子の方なの…！」
「何だって…？」
章雄は驚きで言葉が出ない。
「ほら、何にも分かってないじゃない…」
「心配してたのよ、章雄さんが姉の洋子に駄目にされるんじゃないかって。
それまで随分と見てきてたから母は、姉の男漁りを…」
「洋子さんてそんな人だったの？」
「そうらしいのよ。私の産みの母だから悪く言いたくないけど…、養母の雪子は姉に遠慮して何も言えなかったの。だって自分は妹だから…」
「信じられないな、そんな気配は店では何もなかったし…」
「姉妹の関係って、複雑なの、いろんなことが絡まりあって…」
麗ちゃんは雪子と洋子の二人姉妹の訳ありの過去を語り始めた。

＊　＊　＊

…姉妹の家は、この地の旧家で、かなりの土地や家作を所有し、それを代々継いできた資産家だった。ところが父親の代に事業に失敗し、資産を次々と失っていった。父が亡くなると、その後を追うようにして母も病死し、婚期の洋子と中学生の雪子の姉妹二人だけが残された。洋子は婚期を逸してしまい、遺産として唯一残された住まいを喫茶店に改造し、そこでフレンドの店を開き、妹の雪子が大学を卒業するまで母親代わりで面倒を見ていた。

その頃の洋子は妹思いで仕事一途であったが、それがおかしくなったのは雪子が大学を卒業して働き始めた頃からであった。店の客として出入りしていた男が好きになり、店を放り出して遊び回るようになった。行き遅れ娘の遅すぎる恋であった。ところがその男には妻子があり、男の妻とすったもんだの大騒動があって、結局は洋子が泣きを見ることになった。洋子の男遍歴が始まったのはそれからで、次から次へと男を変え、やがてある男性の子を宿した。その男にも家庭があり、洋子は独身のまま子供を産んだ。他でもないそれが「麗ちゃん」こと「麗子」なのである。洋子は出産後しばらくは子育てをしながら店に出ていたが、好みの客がいると見境いもなく関係をもってはすぐに別れる。そんな多情な女になっていた。

洋子が乳離れしたばかりの麗子を残して男と駆け落ちしたのは章雄が神戸を去った時期と相前後していた。その男も店の客だった。

母に捨てられた麗子は妹の雪子がこれを引き取って養女にしてこれを我が子のように育てた。それだけならまだしも、洋子は駆け落ち先で金に困り、親から姉妹二人で相続した店の土地と建物を無断で売却してしまった。

それからの雪子は麗子をかかえていくつもの仕事をかけ持ちして働いていた。幸い小学校教師の免許をもっていたことから、運良く市内の小学校の教師として採用され定年まで勤めた。退職の二年ほど前に、それまで細々と貯めたお金と教職員共済から退職金担保で借り入れた資金で洋子が売却した土地と建物を買い戻し、これに大改装を施して今のアルルの店を開いた。

洋子の方は、その後も男を転々とし、今は何処で誰と暮らしているのかさえ分からない。勿論、雪子が癌でもういよいよ駄目となった時も連絡が取れず、雪子は姉に会うこともないまま息を引き取った…

＊　＊　＊

それが麗ちゃんが章雄に話した洋子と雪子のあらましである。

「だから私の母は雪子…、洋子の方じゃないの」

そう言って麗ちゃんはからりと笑った。

「じゃ雪子さんは結婚もしなかったの？」

章雄は尋ねた。

「そうじゃないのよ」

麗ちゃんは首を振り、

「大学の時にね、好きになった人がいて学生結婚したんだって」

「だって、僕が店に通ってた頃は独身のように見えたけど…」

びつくりして章雄は尋ねた。

「その通りよ。あの頃は立派に独身。何しろ結婚した相手というのが山男で、結婚して一年も経つかたたないかの頃にグループで北穂高へ向かう途中のキレットで足を踏み外して滑落し、遭難死したらしいの…」

「そう言えば雪子さん、店で山の話をしていたことがある。岸壁に宙づりになって死ぬほど怖い思いをしたって…」

「それ、私も聞いてる」

と麗ちゃん、

「その時に助けてくれたのが結婚した相手の男で、それがきっかけとなって二人は結ばれたってわけ…」

「そんな辛い思い出があったんだ、あの話の裏には…」

「ほんとはどんな気持でその話を幸雄さんに話したと思う、母は？」

そう言って麗ちゃんは「ふふ」と含み笑いをし、

「そっくりだったんだって、幸雄さんが、亡くなった山男の夫に…」

「えっ、僕が…」
「母から後に聞いた話なんだけど…、初めて章雄さんが店に顔を出した時に飛び上がるほどびっくりしたんだって！」
「何を？」
「死んだ夫が戻ってきんじゃないかって…」
「だから母はとても章雄さんのこと意識してたの。でも、横から姉の洋子が章雄さんに妙な気を起こし始め、ついそれに遠慮したってわけ…」
「知らなかったな、そんないわくがあったなんて…」
「それに、章雄さんが急に店に来なくなったでしょ、それが姉の洋子が男と駆け落ちした時期と重なっていたの…、だから相手がもしかして章雄さんじゃないかって、母は随分と気を揉んだりして…」
「へぇー、それで、その疑いは晴れたのかな？」
「間もなくね…」
「僕の方も会社が倒産してしまって、大変だったあれから…」
「同じ会社に勤めてたって人が店に来て、その辺のことも母に話してくれたらしい」
「雪子さんは麗ちゃんにそんなことまで話したの？」
「大きくなってから母から聞いたわ、章雄さんのことは何もかも、それこそコーヒーの好みまで…」
そう言って麗ちゃんは悪戯っぽく笑い、
「母はこの店で、いつかは章雄さんが来てくれるって、ずっと待ってたのよ…」
そう言って、麗ちゃんは章雄を覗き込んだ。

＊　＊　＊

章雄は心に引っかかっていたなぞなぞがやっと解けた。

雪子が店で妙によそよそしかった理由も、初めて入ったこの店で麗ちゃんが注文も聞かずに「いつものね」とコーヒーを出してくれた理由も…」
それにしても、著莪(しやが) のように清げに咲いて見えた雪子が、まさかそんな重い人生を背負って生きていたとは…
しかし、重い人生を生きたのは雪子ばかりではない。章雄とてそれは同じだった。あれからの章雄には色々な事があった。
やっとの思いで手にした家庭の幸せも、定年を迎えるその日まで無事に護り通せた訳ではなかった。幸雄が本店勤務から支店長への栄転が本決まりになる直前に妻の静代の乳癌が分かった。分かったときにはもう手遅れで、癌の細胞はリンパ節まで蝕んでいて手術で取り除くことは不可能で、化学治療を尽くしても余命は残り精々数ヶ月と告げられた。それまで病気らしい病気を知らなかった妻の静代が日に日に弱っていく姿を見るのは、章雄にとって自分の身を切り刻まれるように辛かった。長いどん底生活でくたびれ果てた中年男の章雄を、まだ若い静代が夫として受け容れてくれ、章雄はそれで人並みの家庭に恵まれたのである。いわば人生を救ってくれたその妻が病に朽ちてていくその様を目にしながら、何の救いの手も差し延べることも適わずにその死を見守るほかない自分が訳もなく悲しかった。その静代は章雄が支店長として出勤する姿を目にすることもなく旅だっていった。
それればかりではない…、
妻を失った傷手からまだ十分に立ち直れないでいる章雄の心に止めを刺すような悲劇が見舞った。それは静代が亡くなってまだ一年も経たない翌年の春である。
一人息子の真一が、希望する大学に合格し、入学式を数日後に控えた喜びの時期に、酒酔い運転で歩道に突っ込んできた車に轢かれて命を失ったのである。それも章雄のすぐ目の前で…

拍手と花束で職場から送り出される章雄の心の辞書に夢とか希望とか明日とか、幸せに結びつく言葉はすべて消えて無くなっていた。
失ったのは家族ばかりではない。それまで仕事を人生そのものとして生きてきた章雄は定年で職場を逐われ、生きる意味そのものを失ってしまったのである。

＊ ＊ ＊

「そう…、章雄さんの方も辛い人生を歩いてきたのね」
麗ちゃんがしんみりと言った。
「何だか話がしめっぽくなってきたね」
幸雄は話題を変えたくなり、
「ところで麗ちゃんは結婚は？」
と話題を麗ちゃんの方にふった。
「来たわね、いきなり直球が！」
と麗ちゃんは笑い、
「したわよ一度、一〇年ほど前かな、お店の客でとっても素敵な男がいて、好きになって…」
「それで、どうなったの？」
「捨ててやったわ、すぐに…」
「そりゃまた勇ましいね！」
「だって、一緒になってみたらぐうたらで、賭け事はするわ、酔って暴力は振るうわで、手に負えない奴だった…」
「隠し球に騙されたって訳か！」
「そう、だから反則で退場ってやったわ！」
麗ちゃんはケロッとしている。

「運が悪かったんだね、きっと…、でもまだ若いんだからこれからだよ」
と章雄が励ますと、
「もうこりごり！、結婚なんて…」
吐いて捨てるように麗ちゃんは言った。
妙に実感のこもったその麗ちゃんの言い方が、
「もうこりごり！、山なんて…」
と言った、あの時の雪子の姿と重なって見えた。
気がつくと、それまで晴れて青く輝いていた海面にうすくガスがたちこめ、街もくすんで見えた。
「そろそろ降りましょうか」
麗ちゃんの言葉に章雄が頷き、二人はロープウエーの駅へと向かって歩き始めた。

4

二人はロープウエーを降り、ケーブルの虹の駅にいた。乗り継ぐ筈だったケーブルは一足違いで出た後だった。
「次のケーブルまで少し間があるわ。ここで休んでいきましょう」
麗ちゃんは駅舎に近い展望台へと章雄を案内した。
「この辺りも随分と変わったね」
ベンチに掛けた章雄がしみじみと言う。
「そうよ、阪神大震災でここも被害を受けてケーブルもロープウエーも動かなくなって…、一時は廃業という話もあったのよ。やっと運転が再開されたのは平成一三年の春のことよ、その年に久しぶりに来てみて驚いたわ、その変わりように…」

「確か、この辺も空き地に何台かの自動販売機と、その傍らに古ぼけたベンチが二つ、それも投げ出すように置いてあったように記憶してる…」
「あら、それって母とデートした日のことでしょ！、その古ぼけたベンチで母と二人で一体何を話したの？」
と、麗ちゃんは章雄をからかい、
「遅かったのね来るのが、生きてたら喜んだと思うの、母が…」
と、今度はしんみりした口調で言う。
「僕も会いたかったね雪子さんに…」
章雄も残念がる。
「不思議ね男と女って…、誰かさんと誰かさんのように惹かれあいながら結ばれることもなく離ればなれの人生を歩く二人もいれば、私のように惚れて連れ添ってみても、喧嘩ばかりですぐに別れる腐れ縁の夫婦があったり、そうかと思えば、私を産んだ母の洋子のように男から男へ転々と、結んでひらいて…」
「何だろうね、人生って？」
ぽつんと章雄は言った。
「それ私が聞きたい！」
と、麗ちゃん…
そんな会話を交わしながら章雄は思い出していた。
それは妻と長男、そして仕事まで失って蝉の抜け殻のようになった空白の日々のことを…

＊　＊　＊

朝、起きても何もない、話す相手もいなければ、することもない、誰とも会わず、日暮れまで誰とも言葉を交わすことのない日が幾日も、幾日も続いた。やがてすべ

てが面倒で、顔を洗ったり着替えをしたりすることも、食事を摂ることも、息をすることさえもが面倒になってきて、生きている、という実感が消えていった。
今から思えば、死に場所を求めて彷徨っていたのかも知れない。
気がついたときは比叡の山中を身体一つでほっつき歩き、疲れ果てて真夜中の峰道で半死の状態で蹲っていた。たまたま通りかかった修行僧がそんな章雄を見つけて声をかけてくれた。停年退職して半年ばかりが経っていた。
修行僧は章雄を自らの坊へ連れ帰り、しばらくそこで寝食の面倒を見てくれた。込み入った事情があるにちがいない。誰しもそう察せずにはおれない不自然な出会いであったのに、その修行僧は何一つ幸雄に問うことをせず、
「ここはうまい物も、楽しいことも何一つとしてありませんが、静けさと安らぎだけはたっぷりとあります。お気に召せばいつまでなりと…」
そう言い残すと白衣にわらじ姿でまた修行へと戻っていった。
テレビもラジオもなく、「論、湿、寒、貧」と言われる比叡山の厳しい大自然の中で、文字通りの粗衣、粗食で命をぎりぎりのところで繋ぎとめ、自らを魂の限界まで追い詰める厳しい荒行に明け暮れる修行僧と何日も何日も寝食を共にするうち、章雄は自分の人生は果たして何だったんだろうかと思うようになった。周りの誰もが昇進や昇給、つまりは地位や金を得たい一心で、身を粉にして働き、ストレスの固まりとなって心身をすり減らす。その砥石人生の先に待ち受けていたのは「停年」という体のよい首切り追放である。
それに引き替え、この僧坊の生活は富も出世も、そして地位も名誉も全く無縁で、あるのは自分をとことん見つめる厳しい荒行と風雨をしのぐ一枚の衣、そして命ぎりぎりの糧だけである。それでいて修行僧の顔はいつも柔和で、その面相に憂いや曇りのかけらもない。痩せてこそいるが心身ともに健康で目はどこまでも澄んでいる。俗世

の生活とこの修行僧の生活と、一体どちらが真に人間らしい健康な生き方なのか。
その疑問はしばらくその僧坊で修行僧と起き伏しを共にしているうち、章雄の中で少しずつ、しかしはっきりと分かってきた。これまで社会という汚れた水の中で、それこそが幸せを与えてくれるものと疑いもせず、たたひたすらしがみつき、誰もが目の色を変えて追い求めていた富や財産、そして地位や名誉など、そうしたものこそ、人を不安や苦しみに追い詰める見えざる敵の正体であり、これらをきれいさっぱりかなぐり捨てたその先にこそ、喜怒や哀楽の世界を越えた真の安らぎの境地があるのだということが…

＊　＊　＊

「なに考えてたの？」
傍らで麗ちゃんが幸雄の顔をのぞき込み、
「だって、急に黙り込むんだもの。私なにか気に触ることでも言った？」
と尋ねた。
「先ほどの続きだよ。人の一生って何だろうと思ってね」
「聞きたい、それ、何なの人生って…」
「夢…、かな？」
「えっ、何？、なんて言ったの今？」
麗ちゃんはキョトンとしている。
「昔、沢庵（たくあん）という坊さんがいたの知ってるかい？」
「聞いたことある。宮本武蔵のドラマに出てくるあの恐い坊さんでしょ…」
「そう、沢庵宗彭（そうほう）というんだそうだけれどね…」
「双方か片方かしらないけど、その沢庵さんがどうしたの？」
「その沢庵が遷化、つまり死ぬ時に「夢」と題する遺偈を残しているんだそうだ」

「遺偈って何よ」
「昔の禅僧は死ぬ時に自らの禅の境地を短い詩文に残す習わしがあったらしくてね。いわば禅僧の辞世だな」
「それでどんな辞世を残したの、その沢庵さんて坊さんは？」
「百年三万六千日、弥勒観音幾是非、是亦夢非亦夢、弥勒観音亦夢、仏云応作如是観…、云々とあったそうだよ」
「ちんぷんかんぷんね…、その百年三万六千日…云々のかけ算はどういう意味なの？」
「難しいね、言葉を越えた禅の境地だからね。私もよくは分からないけど、つまるところは、この世は何もかも夢のようにはかないもの、あれこれと執着してはいけない、そう仏が説いている。というほどの意味じゃないのかな」
分かったような、分からないような顔をして麗ちゃんは聞いている。
章雄は続ける。
「この沢庵という坊さんは幕府の寛永法度による宗門弾圧に抗議したいわゆる紫衣事件で、出羽の国に流されたり、後に許されて三代将軍家光の帰依を受けたりと、その生涯を仏門と世俗の権力の狭間で揉まれながらも、禅の道に徹しぬこうとした自らの波乱の一生を、その死の間際に、自らの仏門での栄誉も、将軍の帰依まで受けた俗界での名誉も、すべてこれ夢と放下し、自らを一墨染めの遺骸として野末の土に戻すべく、夢と題する遺偈を認め、その余白に自分の遺骸を火葬にせず、夜陰ひそかに運び出して野に深く埋め芝をもって覆い塚を造らぬこと、法要、年忌、供物、石塔など一切不要、など自らの死後のはからいをこと細かく書き記し、それを認め終わって筆を投げるように息を引き取ったと伝えられている…」
「何て珍しいお坊さんね沢庵さんて、でも何かかっこいい。“あれも夢、これもまた夢”だなんて、私もそんなふうに気取ってみたい…！」

麗ちゃんは前方に目をやりながらそう呟き、突然、
「あっ！」
と叫んでベンチを飛び出して草むらにしゃがみ込み、
「紫苑、紫苑よ、章雄さん！」
と、叫んだ。
その指さす草むらには、かすかに紫色を帯びた野菊のような数輪の花がひっそりと咲いていた。
「しおん、って言うの？、その花…」
章雄は傍に歩み寄り麗ちゃんに尋ねた。
「そう紫苑よ、でもここで見るのは初めてね…」
麗ちゃんは嬉しそうに言い、
「母だわ、母がここに咲かしてくれたの、きっと！」
そう言いながら、またベンチへ戻った。
「母が一番好きだった花なの紫苑は…。今昔物語に出てくる紫苑の話を知ってる？、私よく母から聞かされたわ…」
麗ちゃんは母から聞いたという今昔物語の説話を章雄に語って聞かせた。

＊　＊　＊

それは今昔物語集巻二九の第二七に出てくる「兄弟二人萱草と紫苑とを殖うる語」と題する説話で、昔、ある所に二人の兄弟がいて、父の死を大変悲しく思い、二人して遺骸を墓に埋め、そろってお参りを続けていた。年月が経つうち二人は公に出仕するようになり、忙しくて墓参りもままならぬようになった。そこで兄が思うには「萱草（かんぞう）」という草は思いを忘れる草とされているので「これを墓の周りに植えよう」、そうすれば父が亡くなった悲しみが早く忘れられる。そう考えて墓の周りに萱草を植えた…
これを知った弟は兄の心を情けなく思い、自分は親を思う心を忘れまい、「しおに（紫苑）」という草は、それを見る人が思いを忘れないと云う喩えがあるのでこの花を植えよう、そうすればいつまでも父を忘れずにいられる。そう思って墓の周囲に紫苑を植えた、云々…

＊　＊　＊

「そんな説話なの、私この話を思い出すたびに母の雪子と私を産んだ方の洋子のことを思うの」
と麗ちゃんは言い、
「実の母の洋子は男から男へ転々とし、自分が産んだ我が子のことも忘れていた人だから、さしずめ萱草を植えた方の口の女ね」
と笑い、
「母の雪子は、きっと紫苑の花を植えた方の口なの…」
と言いながら、
「これ」
と、麗ちゃんは自分の耳を指さした。
その指の先には淡紫色をおびた野菊のような形をしたイヤリングが美しく輝いていた。麗ちゃんが店でつけていたあのイヤリングである。
「これ母が私に残してくれた大事な形見なの。今では私の一番の宝物」
そう言って麗ちゃんはにっこりと笑い、
「母はこれを知り合いの宝飾店に注文して作ってもらったらしいの。だから世界でたった一つきりのイヤリング」
麗ちゃんは得意そうに言った。

「雪子さんは何故そんなに紫苑の花が好きだったのだろう？」
「紫苑の花言葉を知ってる？」
麗ちゃんは真面目な顔をして章雄に尋ねた。
「さあ…」
章雄が答えられないでいると、
「一君を忘れじー、だって！」
と麗ちゃんはあでやかな笑みを浮かべ、
「私は母を忘れないためずっとこのイヤリングをつけているわ！」
でも…、と麗ちゃんはしばらく間をおき、おもむろに、
「母は誰を忘れまいとこれをつけていたのかな？」
と章雄の顔を覗き込み、
「うふふ…」
と笑った。

了。